

チェヴィオットの鹿狩り

- 1 われらが王さまに栄えあれ
われらが暮らしに安らぎあれ
昔々 悲しい狩りが
チェヴィ・チェイスでありました
- 2 猟犬を連れ 角笛を吹き
パースイは鹿狩りに出かけました
のちの世に生まれる子らも
その日の狩りを悲しむでしょう
- 3 屈強のノーザンブランド伯パースイは
神に誓いをたてました
スコットランドの森の中で
夏の三日を愉快に過ごす
- 4 チェヴィ・チェイスのみごとな鹿を
しとめて 必ず持ち帰ると
この話が
スコットランドのダグラスに伝わりました
- 5 ダグラスはパースイに使いを送り
「狩りは許さぬ」と言いました
パースイは ひるむことなく
森に出かけてゆきました
- 6 勇敢な射手を千五百人
選りすぐりのつわもの揃い
出番となれば
矢は確か
- 7 勇敢ですばやい猟犬たち
マジカを追いたてるのはお手のもの
狩りの始まりは月曜日
夜明け前のことでした
- 8 昼にもならない 朝のうち
百頭の肥えた牡鹿が殺されました
昼ごはんを食べた後
鹿狩りは再び始まりました
- 9 射手たちは丘に集まり

敵の襲撃に備えました
背後はとくに嚴重に

一日 守りを固めました

10 獵犬は森を駆け回り

逃げる鹿を追いました

獵犬のきやんきやん吠えたてる声が

丘と谷にこだましました

11 パースイがしとめた獲物に駆け寄ると

それは幼い子鹿でした

「ダグラスは 今日ここで

わしを討つと言ったはず

12 「やつが来ないと判つたならば

もはや留まることもない」

そのとき 勇敢な若者が

パースイに言いました

13 「ご覧ください ダグラスがやって来ます

兵士たちは輝く鎧を着ています

二千人ものスコットランドの射手たちが

こちらに進軍して来ます

14 「トウイード川のすぐそばの

美しいティヴィデイルの射手たちです」

「狩りを止めよ」とパースイが言いました

「急げ 弓を取れ

15 「皆のもの わしとともに

勇気を示せ

スコットランドにもフランスにも

わしに勝るものはない

16 「馬上試合でわしに勝つたものはない

しかし これがわしの運命なら

一騎討ちで

ダグラスの槍を折ってくれよう」

17 ダグラスが乗ったのはミルクのように白い馬

勇敢な貴族のいでたちでした

先頭に立ち

輝く鎧を着けていました

18

「おまえたちは何者だ
ここで狩りとは凶々しい
許しも得ずに

わしのダマジカを殺すとは」

19

パースイ自ら

先頭を切つて答えました

「名のりを挙げよなど

聞く耳もたぬわ

20

「おまえの鹿を殺すためなら

この命も惜しくはない」

ダグラスは厳肅に誓いをたて

声を荒らげて言いました

21

「つべこべぬかす その前に

どちらかの首が落ちるだろう

パースイよ おまえは伯爵

わたしの立場も同じもの

22

「パースイよ よく聞かがいい

大勢の手下を殺すのは忍びない

罪もなければ

悪事をはたらいた訳でもない

23

「おまえとわしとで一騎討ち

手下には闘わせまい」

「望むところだ」とパースイ

「否いなと言つては名がすたる」

24

そのとき 勇敢な騎士が進み出ました

ウィザリントンがその名前

「ヘンリー王に恥ずかしく

申し訳がたちません

25

「大将が馬にも乗らずに闘つて

わたしがそばで見えていたなどと

おふたりは高貴なご身分

でも わたしは兵士の身

26

「最善を尽くします

闘う力があるうちは

剣を操る力があるうちは

命のかぎり闘います」

27 弓を引くイングランド軍の射手たちは

いずれ劣らぬ忠義もの
一段目の矢が放たれて
八十人のスコットランド人が殺されました

28 チェヴィ・チェイスで 猟犬を連れ角笛を吹き

「イングランドの鹿を追え」とダグラスの命
ふたりの大将は あらんかぎりの力をしぼり
槍をぶるぶる震わせました

29 両軍はあちらこちらでしのぎをけずり

我先にと攻め込みました
たくさんの勇敢な兵士たちが
喘いで大地に倒れました

30 ああ 見るも無残な光景でした

ひとりひとりが槍を手にして
胸からは
血の滝を流しました

31 ついに 屈強のふたりが刃を交え

大軍の大将よろしく闘いました
狂い獅子のように 相手を襲い
それは激しい闘いでした

32 大粒の汗をしたたらせ

無敵の剣で闘いました
噴き出す血は大雨のように
頬を伝って流れました

33 「降参せよ パースイよ

そうすれば 約束しよう
スコットランド王ジェイムズさまに
召し抱えてもらうよう助言すると

34 「身代金をたっぷりだして

おまえの勇気を伝えよう
わしが今まで出会ったなかで
おまえは最も勇敢な武将」

35 「いいや ダグラス」とパースイ

「なにをほざくか

スコットランドの犬などに
降参するとはたわけた話」

36 そのとき 一本の鋭い矢が

イングランド軍から放たれて
ダグラスの胸を射抜いて

深傷ふかでを負わせたのでした

37 ダグラスは今わの際きわに言いました

「皆のもの 闘うのだ

わしの命はこれで尽きたが

パースイの目の前で倒れるは無念」

38 ダグラスはこと切れて

パースイがその手を取って言いました

「ダグラスよ おまえの命を救えるならば

わしの領地をすべて捨てて捨ててもかまわない

39 「ああ おまえの死を悲しんで

わしの心臓が血を流す

これほどの名うての武将が

こんな災いに出くわすとは」

40 スコットランド兵のひとりが

ダグラスの倒れる姿を目の当たりま

心の中で

パースイへの復讐を誓いました

41 その武者の名はサー・ヒュー・モンゴメリー

輝く槍を手持って

勇ましい馬にまたがって

疾風のように攻め込みました

42 多勢の敵もなんのその

イングランド軍の射手の間をかくぐり

パースイの身体を

憎しみ込めて突き刺しました

43 カ一杯 モンゴメリーは

パースイを突き刺しました

槍の先が 背中に向こうに

一ヤードも突き出しました

44 こうして ふたりは死にました

誰よりも気高い勇気を持ち主でした

そのとき イングランドの射手のひとりが

パースイが殺されたことに気が付きました

45 その射手が手にしていたのは

無類にしなう一本の弓

一ヤードもの矢を

頭上高く引きしぼり

46 サー・ヒュー・モンゴメリーに狙いを定め

その矢を放ったのでした

矢飾りの灰色のがちようの羽根が

胸の血に濡れました

47 闘いが始まったのは夜明け前

終わったのは日暮れどき

夕暮れの鐘が鳴るころも

闘いはまだ続いておりました

48 パースイとともに倒れたのは

エジャトンのサー・ジョン

サー・ロバート・ハークリフにサー・ウィリアム

勇敢な男爵のサー・ジェイムズ

49 サー・ジョージとサー・ジェイムズは

誉高い騎士でした

善良なサー・ラルフ・レビーも殺されました

その武勇はあっぱれでした

50 哀れ ウィザリントンには

痛ましいことになりました

両足をもがれて達磨さん

胴だけになっても闘いました

51 ダグラスとともに倒れたのは

サー・ヒュー・モンゴメリー

サー・チャールズ・モレルこそ

敵陣から一步も引かぬつわものでした

52 無頼漢のハークリフのサー・ロジャー・ヘヴァーは

サー・チャールズ・モレルの甥でした

信頼厚いサー・デイヴィッド・ラムウエルも

死をまぬがれなかつたひとりです

53 マックスウェル卿も同じ運命さだめ

ダグラスとともに果てました

二千人のスコットランドの槍兵で

残ったのは たった五十五人だけ

54 千五百人のイングランドの軍勢で

家に戻れたのは たった五十三人だけ

残りは全員 チェヴィ・チェイスの

緑の森で殺されました

55 闘いの夜が明けて 女たちが駆け付けて

夫の死を嘆きました

しよっぱい涙で傷口を洗っても

すべては空しいことでした

56 真つ赤な血糊の夫の遺体を

女たちは連れ帰り

何千回もくちづけをして

土の中に埋めました

57 エディンバラはスコットランド王の治めるところ

そこに知らせが届きました

勇敢なダグラスが不意打ちにあい

一本の矢に倒れたと

58 「なんとという悲しい知らせ」とジェイムズ王

「ダグラスほどの誉高い大將は

この世にふたりといたくないことを

スコットランドはしかと知れ」

59 時をおかずに 同じ知らせが

ヘンリー王に届きました

ノーザンバランドのパースイが

チェヴィ・チェイスで殺されたと

60 「神の御元で安らかに」とヘンリー王

「死んだものにはそれこそ至福

でも この国には

パースイに劣らぬつわものが五百人

61 「スコットランドの犬どもに

闘い済んだとは言わせまい

勇敢なパースイを弔うため

やつら皆に復讐しよう」

62

ヘンリー王の誓いは
ハンブルドンの闘いで果たされました
一日の闘いで 五十人の騎士たちが殺されて
名高い領主も殺されました

63

名も無い他^{ほか}のものたちも
何百人も死にました
パースイが催したチェヴィ・チェイスの鹿狩りは
こうして 終わりとなりました

64

われらが王に 神のご加護を
この国に 実りと喜びと平安を
あのような争いが 二度と再び
尊いものたちに起りませんように

(中島久代訳)